

昭和四十六年五月二十八日 ご講演

「歴史における変化と不変」

東京大学文学部長 林 健太郎 先生

ただいま大変ご丁寧なご紹介をいただきまして恐縮しております。本日は和敬塾の皆様の前でお話をすることになりましたが、わたくしは商売が歴史なものですから、何か歴史の話をしようと思っております。けれども、今ご紹介いただきました中にもありましたが雑事多忙でありまして、あまり準備をしていないのでございます。そこで、あらためたむずかしい話はしないつもりでおりますけれども、歴史について日ごろ考えていることをお話ししたいと思っております。

味に使われております。むしろ、それぞれ全く反対の意味に使われることが多いように思えます。たとえば「この建物は歴史的な建物だ」と申しますと、「ずっと昔からある」という場合だと思いません。ところが、最近の論文をお読みになる場合、ことに社会科学の方面では、「昔」だとか「古い」ということとは逆に、ある特定の状況に結びついているものが「歴史的」であるといっております。

な状況に即したものの、これを「歴史的」というふうにするのであります。そうしますと、この歴史という言葉に「古い」あるいは「変わらない永劫的なもの」を含ませる場合と、「変化し発展していくもの」というふうにする場合の、二通りあるということに気づかれると思います。社会科学などの影響だと思いますが、どちらかといえば最近「変化」「発展」という面を強調した意味で使うことが多いのではないかと思います。これは理由がありまして、歴史というものの性格は変化・発展であるということがまず考えられるのであります。実際、歴史をご覧になりますと、古代・中世・近代と時代分けがしてあります。時代分けがしてあるということは、それぞれの時代にそれぞれ違ったものがあるわけですから、中世はいろいろな点で今とちがっています。近代は中世を否定してできた

今日は「歴史における変化と不変」という題を出しましたが、何かわかったようなわからないような、あるいはわかったりきったことのようにお思いになるかもしれません。しかし、この歴史という言葉は、われわれも普段から使っておりますけれども、考えてみるといろいろな意

「超歴史的」といいますと永遠に不変のものであります。それに対して「歴史的」という言葉は、非常に変化して発展していくというところから、「歴史的条件」等というように、ある特定の状況における条件を意味するような場合に使用しております。社会科学の人はよく「歴史的」「社会的」という言葉をくっつけて申しますけれども、特定の時代とか状況のようないくつか、たとえば変化・発展していく具体的な

ことが多くではないかと思えます。これは理由がありまして、歴史というものの性格は変化・発展であるということがまず考えられるのであります。実際、歴史をご覧になりますと、古代・中世・近代と時代分けがしてあります。時代分けがしてあるということは、それぞれの時代にそれぞれ違ったものがあるわけですから、中世はいろいろな点で今とちがっています。近代は中世を否定してできた

ものです。そういう意味で、たえず変化して発展していく、そういうものが歴史の相であることはまちがいないのであります。

われわれは、日常生活で歴史に対する興味というものを多かれ少なかれもっていると思います。たとえばテレビを見ますと、人気のある番組はとかく歴史をあつかったものが多いですね。NHKでいつも連続ドラマをやっております、わりあいと視聴率の高い番組がありますけれども、こういうのはまず歴史ものです。視聴率が高いということは面白いのだと思いますが、先ほど申しました歴史の二重の性格というものが、知らず知らずのうちに興味の中にも反映していると思います。

というのは、現代ものとすと、われわれの日常生活に出てくるような人間が出てきて芝居をしているわけであります。そういう意味ではわれわれに近いですが、その代わり、よく知っている世界ですからあまりおもしろくない。歴史ですと、風俗、生活様式、すべての点でわれわれとちがった世界ですから、ちがったものに対する興味というのがあると思えます。ところが、SFなんかですと、

宇宙の星からやってきた怪人なんてのが出てくる。こういうのは、われわれと共通点がない。全然ちがってしまおうと、われわれと心の通うところがなくなってしまう。歴史のドラマを見て感ずる興味というのは、今とはちがった世界であるにもかかわらず、今日のわれわれと心において共通なものがあるということです。だいぶ前のことで笑われるかもしれませんが、『徳川家康』（山岡荘八）

という小説が評判になったことがありました。私は読んでおりませんが、評論になった理由は、徳川家康が天下を平定して幕府をつくったやり方が、今の会社経営に役立つからと聞いております。半ば冗談みたいなところもあるかもしれませんが、必ずしも冗談ばかりではないと思います。といいますのは、たくさんの人を使って会社を経営していくことはやはりむずかしいことで、同時に、会社同士の競争というものが激しい。これが、戦国時代に群雄割拠のなかで人間が争って勝利する、勝利して天下を統一すればまた国内の経営に努力を要する、ということに通ずるものがあると思えます。その点、われわれが歴史のドラマを見て感ずるのは、われわれとちがう世

界だという興味と並んで、われわれと同じような人間が活動しているということが、感銘や教訓を与えるのです。

そういうわけで、歴史に二つの面があるということは、われわれの卑俗な、日常的な生活の中でも無意識的に知っているわけであります。しかし最近の風潮といえますと、とにかく歴史というものは変化して変わっていくのだということのほうが強調される。これが現代のひとつの傾向だと思えます。いちばん端的な例は、よくいわれる「断絶」という言葉であります。さきほどご紹介のなかに大学紛争の話が出ましたけれども（※林先生は東大文学部長時代の一九六八年、全共闘によって東大文学部二号館に監禁された）、あのときも盛んに新聞などに出たのがこの断絶という言葉でありました。われわれ年寄りと皆さんのような青年のあいだには断絶ができてしまつて、話を通じないということが盛んにいわれました。未来は青年のものであつて、これからの世の中はわれわれのような大人の考えているのとはまるでちがったものになつてしまふのだから、年寄りが若い者に自分の考えをわからせようと思つてもダメだというようなこと

がよくいわれました。だから若い者のいうことを聞かなくちやいかんというような言論もありましたし、それから現代と社会に絶望してしまつたような議論も出ました。

しかし、こゝういう点につきまして結論を申しますと、わたくしはあまり断絶ということを感じませんでした。今でも感じておりません。ただし、たしかに学生運動のある一面におきましては、今までの常識や通念の通用しないような、ちよつと唾然とするようなことがありましたが、あの紛争ももう収まりました。当時は日本の大学生全体がすっかり変わつてしまつたようにいわれましたけれども、じつをいうとそんなことはないのでありまして、暴力を振るつたりした学生はごくわずかであつたと思います。そういう運動に対して何らかの意味で共感した、共鳴したという人の数はかなりあつたかもしれせん。しかし、現在になつてみますと、一見したところ当時の雰囲気はなくなりまして、わたくしの学校でも大変じめで大人しく、よく勉強する学生が圧倒的に多いのであります。学生と直接会つてみても、紛争の起こる前とちつとも変わりません。昔のほうが

先生の前でかしくなつていきましたが、根本的にはわれわれが学生だつた頃とあまり変わりません。紛争のあいだは、師弟関係などは古臭い、そんなものはいらない、まちがっているんだというような議論がおこなわれましたが、やはり先生はものを教え、学生は教わるものです。先生もよく見ればいろいろな欠点があるし、講義でまちがつたことを言つてしまつて、あとで本を読んだらどうもまちがっているらしいなということもないとはいへません。けれども、自分でいうのはおかしいですが、全体としてみればやはり学問的な勉強を積んだ人が先生になつていますから、そういう意味では先生のほうがえらいわけですね。そうすると、教える人と教えられる人の関係というものは、戦前だろうと、あるいは紛争前だろうと現在であろうと、根本的には変わらないわけでありませう。ですから今日からみると、あの頃に「断絶」と言つていたのはちよつと言ひすぎであつて、今の学生は昔とちがつて火星の人間みたいになつてしまつたと思つた人があると思はれば、それは思ひがちであると思ひます。

しかし一方において、世の中がどんど

ん変わつていくことは厳然たる事実であります。これまた否定することはできません。現在は非常に変化の激しい時代であります。ことに東京のような大都会に住んでおきますと、どんどん新しい家が建つたり道路が出来たりと変化が激しい。技術的な方面の変化ですが、それに応じて人間の生活が変わつてまいります。ほんの五、六年前と比べてみても、諸君の日常生活において以前でできなかったことが今日ではできるといふような変化が多いと思ひます。そこで変化の面に注目し、「歴史的」ということを変化・発展と考へたことは、それなりに意味をもつております。

もう少し歴史的に過去の事例について見ますと、歴史を變化の相において見るといふことが強調されるようになってのは、やはり近代の産業革命の時代以降だと気がつきます。だいたい十八世紀頃から、歴史は變化・發展するものだという考へ方が出てきました。これは当然でありまして、人間の歴史といふのはかなり長いあいだ、非常に静的な、動かないものであります。同じような生活が繰り返される歴史が長かつたわけです。これが變化し發展するという生活にな

りましたのは、ひと口に申しまして、産業革命によってわれわれの生活の上に科学技術が大きな影響を及ぼすようになって以来のことです。ということは、せいぜい十八世紀から十九世紀くらいのことでありまして、社会がどんどん変わっていくからこそ、歴史は変化するものだという考え方に固定したのであります。そこから、社会のあり方や人間の行動は時代によってどんどん変わっていく、したがって変化に応じた生活なりもの考え方をしなければいけないという考えも、また一般にひろがってきたと思います。十八世紀以来、「歴史の過程は進歩の過程である」という考え方がひとつの常識のようになりました。

そこで歴史をみますと、先ほど古代とか中世とか近代とか申しましたが、これは単に時代を便宜上に三つに区切ったわけではありません。近代の社会は中世の社会とは根本的にちがった社会であり、中世の社会は古代の社会とは根本的にちがった社会であるという認識があるからこそ、古代・中世・近代という分け方がされているのであります。もっと具体的にいえば、近代の社会はデモクラ

シーの社会である。中世の社会は、俗な言葉を使えば封建時代である。このデモクラシーとか民主主義とかいわれる社会は、人間が平等であるという認識の上に立って、すべての人間が社会の形成に参加する仕組にできている。それに比べると、封建時代は侍と町人のような具合に身分の区別が厳然としておって、人間は人間のまま誰でも平等だというのはなく、どういうふうに生まれたかによって権利もちがえれば義務もちがうという社会でありました。ですから、中世の封建時代には近代とはちがった人間関係や価値観が存在した、これはそのとおりであります。たとえば道徳を考えてみますと、道徳というものは時代によって変わるものであって、したがって近代におきましては永遠の道徳はないという考え方が優勢であったと思います。そういう考え方が極端にいきますと、さつき申しましたジェネレーションの間にギャップがあるという考え方にもなるわけでありまして、大人のもっている道徳意識はもう青年には通用しない、青年には青年独自の価値観があるという考え方になってまいります。

ところが、今日ここで申しあげたいの

は、歴史の変化・発展という面を認識することは非常に必要ですが、同時に変わらないものがある、それを認識することが非常に必要だということなのであります。どうして変化する面が歴史の本質だと考えられるようになったかと申しますと、これも歴史観の歴史、変遷というものを考えてみますと、おのずからそういう考え方が生まれてきた根拠がわかるのであります。

近頃はいろいろな歴史観があります。人間の社会はデモクラシーの発展であるという見地から考えるのが「発展史観」です。それから、「発展段階説」というものがありまして、それぞれの時代で社会の仕組がちがっているから、人間の生活様式ばかりではなく価値観も変わっていく、というものであります。この考え方が十八、九世紀以降、ある意味では歴史意識の主流をなしましたが、こういう考え方が生まれたのはだいたい十八世紀の啓蒙主義の時代、フランスでフランス大革命というものが起こる前でありまして、諸君も西洋史の常識で知っておられると思いますが、当時のフランスはいわゆる絶対主義という専制政治の行われておった時期でありました。貴

族、市民、農民と身分の区別がはつきりしており、平等ではなかった。そこで一般の民衆の不満が高揚しまして、フランス革命が起こったわけですが、この革命を導いた思想は啓蒙主義の思想でありました。世の中にいろいろ不幸があるのは、人間が理性というものに目覚めないからである、われわれが理性に目覚めて理性に従った生活をすれば、この世の中のもろもろの不幸はただちに解決してしまう、という考えであります。フランス革命というのは啓蒙主義の思想を實行に移したわけで、たしかにああいう革命をやったことによつてそれまでの身分制度のようなものが打破されまして、デモクラシーの社会ができました。これが進歩をもたらしたことはそのとおりであります。

ところが、あまりにも機械的に啓蒙主義の思想を信奉した結果、革命のときにはいろいろとおかしなことがあります。たとえばフランス革命をやった人たちは、たとえば暦というものを変えています。われわれの現在使っております暦は、一年が十二ヶ月あるかと思うと、一方では一週間という数え方もあり、一ヶ月は三十日であったり三十一日であったり二十

八日であったり、月の終わり方もデコボコであつて、不合理である。一ヶ月が一週間と合わないから不便である。これはわれわれも経験しているところでありまして、たとえば第一日曜と第三日曜の予定を決めますという、毎月の日がちがいますから、今年の第一日曜は何日かいちいち調べないとわからない。フランス革命をやった人たちは、こんなことは不合理だから合理的にすればいいと、

「ひと月は必ず三十日」と決めてしまいました。それから、一週間が七日なのがないといおかしいので、一週間は十日にする。そうすれば、一ヶ月は三週間ですむ。すると一ヶ月三十日で十二ヶ月が三六〇日、五日余つてしまいます。これは太陽の運行か何かの関係ですから、勝手に長さを変えるわけにはいきません。しかし五日余つてもちつともかまわない。余つた時間はみんな休日にする。そういうことで暦をつくりました。革命暦または共和暦といひます。それから、当時のヨーロッパはキリスト教が支配的な宗教でしたが、宗教というのはいずれも理屈ではありません。信仰ですから、われわれが理性で考えると理屈に合わないことがあります。キリスト教や教会、宗

教というものは無知蒙昧の所産である、ということまで否定する。代わりに理性の宗教をつくりました。教会を没収して、そこに人が集まつて、元はキリストやマリアがいたところで青年男女がダンスしたりする。そのうち、理性の女神というやつをつくらうじゃないかということになりまして、当時人氣のあつた踊り子を理性の女神に仕立て、行列してお祭する。

こういうことになると、理屈に適つたことをやっているから万事めでたしめでたしでうまくいくかという、人間の心はそういう具合にいかないのです。政治の面で見ると、フランス革命では平等を強調した結果、ジャコバン党という政党が出てきまして、これが反対党を全部追放したり処刑したりして独裁政治になりました。ところが、独裁政治が始まりますと、今度はジャコバン党の中でもいろいろな派閥ができます。ジャコバン党の中に、ダントン、ロベスピエール、エベールという三つの派ができてまして、今度はこの三つがお互いに反目しあいます。独裁政治といひますと、派閥抗争は相手を殺さないとおきまりません。結局、ダントンとロベスピ

エールが手を結んで、こいつはあまりいばりすぎるといのでエールを処刑してしまふ。そのうちに今度はダントンとロベスピエールが相容れない政敵になりまして、ダントンが処刑されてしまふ。こういうことで、人間が自分の頭の理屈で考えた合理的なことを何でもやるうということになると、自分が合理的だと考えることが絶対に正しくて、それとちがったものは相容れないというふうになり、これは相手を殺すよりか仕方がないことになる。ということ、最後はロベスピエールの個人独裁のようになりまして。そうすると、今度は同じロベスピエール派の間でもうっかりするととつ捕まうて殺されるかもしれないといので、とうとうロベスピエールが殺されてしまふ。フランス革命はジャコバン党の独裁政治が自滅したかたちになりましたが、そのあとまたグダグダして、結局ナポレオンのような軍事独裁政権が出てまいりました。

そういうことで、人間が自分の理性で考えて、これは合理的だ、非合理的だと単純に割り切つて世の中のことを全部やるうとしますと、何が合理的であるのか、何が正しいのかということ人間同

士の争いがまた激しくなる。フランス革命はそれで却つて混乱して、最後は強力な軍事力をもったナポレオンのような人間がまた専制政治を行うことによつて初めて社会が安定したという非常な矛盾撞着が起こつたわけでありませう。しかし、とにかくフランス革命では身分制度のようなものが廃止され、近代の民主主義が生まれてくる変化・発展の過程ではあつて、その認識そのものは事実合致しているところもありますから、その後ずつと受け継がれて近代の歴史観を形成したと思ひます。

そのうちに労働問題が起こつてまいります。産業革命の結果、新しい工場制度ができて、新しい工場の経営者と、その工場に使われている労働者が出てきました。当時、労働者の生活は悲惨でありましたから、労働者の運命をなんとかしなければいけないということ、社会主義という思想が生まれます。そのうち一番ラディカルなものとしてマルクス主義が生まれてまいります。これは、歴史とは階級闘争の歴史であつて、産業革命の結果できた資本主義社会の次に社会主義社会が来るという考え方があります。労働者（プロレタリアート）が

革命を起こして社会主義の社会をつくる。つまり、歴史というものは社会主義社会をつくるための準備段階のようなものである、という考え方が、マルクス主義の歴史学によつて出てきたわけでありませう。この考え方は、今日、社会主義プロレタリアート革命をやつたソ連（当時）の現状や中共（中国共産党）の現状をみますと、一向に自由でもなければ平等でもないのがわかりますね。まことにソ連なんていうのは、諸君も旅行してご覧になるとすぐわかると思ひますが、これは独裁政治でありまして、一般民衆は政治のことは口出しできないし、政府の高位高官なんてものはまるで雲の上の存在でありまして、かえつて支配者と一般国民とのあいだの懸隔は大きくなつております。思想の自由もなくなつてしまふし、生活面、経済的には向上しているかという点、消費生活という点ではわれわれに比べてはるかに貧しいといのが現実の姿であります。ともかく、歴史は階級闘争の歴史であつて、一番あとに出てきた階級であるプロレタリアートが社会主義革命を起こして、貧富の懸隔、あるいは政治的な支配階級と一般国民の差はなくなり、本当に平等で

自由な社会がくるという考え方であります。それは案外、現実のソ連とか中共の状態は別としても、やはり一般の人の中にならぬ根強くあると思います。

そういうふうにして、進歩史観、発展史観というものが、今日ではある意味で支配的な史観になっていたのであります。いま申しましたように、こういう史観は十八世紀の啓蒙思想から始まりまして、フランス革命、産業革命の経験から出てきたわけです。これをさらに歴史的にみますと、案外この歴史観というものはキリスト教の史観と似ている。あるいは元はそこにあったのだという人がおります。じつは、このことは前からよくいわれておりました。ドイツの学者でカール・レーヴィット(Karl Löwith, 1897-1973)という人がいます。いま(講演当時)生きています人ですけども、日本に長くいた人でありまして、戦前に東北大学の教授をしていた人です。この人が歴史哲学についていろいろの本を書いておられます。翻訳もありまして、『世界史と救済史』(一九六四年刊)という本があります。レーヴィットだけがそういうことを言っているのではなく、日本語でわりと簡単に読める本の代表的なもの

のとしてあげました。キリスト教の史観というのは、エホバの神がこの世の中をつくったというものです。聖書に書いておられますように、神がアダムとイブ、人間をつくった。人間はそこで原罪を犯している。よつて、人間の社会は罪の社会である。そこへキリストが現れて、人間の罪をキリストが一身に負つて十字架の刑に処された。そこから、人間の歴史というものはすべて、神と悪魔の、あるいは善と悪との対立である。しかし、将来のある時期になると、やがてエホバの神の審判が下ります。いわゆる最後の審判というやつで、そこで悪人は永久に罰せられて地獄に落ち、善人は救われる。千年王国という極楽みたいな社会が実現する。こういう考え方がキリスト教にはあるわけでした。ヨーロッパの中世時代の人間はそういうキリスト教的な考え方をしておりました。これが近代、十八世紀の啓蒙主義の時代になりますと、神への信仰という傾向は抜けてしまひまして、神を否定するようになる。けれども、こういう考え方は宗教心を取り去つた世俗的な私たちにおいて、ずっとヨーロッパ人の中に生きつづけます。たとえば、人間の歴史は階級闘争の歴史であ

る、最後のプロレタリアートの勝利によつて無階級の社会がくるといつたマルクスの史観です。マルクスという人は無神論者であつて、キリスト教の信仰を正面から否定した人です。たしかにマルクスは、人間の上に立つひとつの絶対の神というものがある、というところはなくしてしまつた。しかし、この世の中を善と悪に分けて考え、やがて最後の審判みたいなのが下ると理想の社会が出現する、という点で、キリスト教の史観の半面は継承していたことになりまひます。われわれの生活には、どんな変化して発展していく面があるということとは疑いえないことでありますし、とかく歴史というのは変わつていく。将来は今とはちがつたものになるだろう、という考え方もありますし、現状に対していろいろな点でわれわれは不満をもつております。そうになると、何か悪いものがどこかにいるのであつて、やがて将来は悪いものがなくなつて、よりよい世の中がくるのだという考え方や要求は、われわれの心の中にどうしてもあります。そのために、歴史というのは、変化・発展だけでなく同時に何かの変化を待望し、あるいは将来に理想国を夢みるという考え

方を生みだしていつているのであります。

ところが、こういう考え方の行きづまりが最近わかってきたと思います。マルクスの階級闘争説や社会主義社会を美化する考え方が、今日行きづまっていることは前に申しましたが、単にそれだけではありません。たとえば、われわれの生活の向上とか、生活上の利便とかいう点において、人間の歴史を進歩の歴史とみると、これは技術革新にしても生産性の向上にしても、どんどんよくなっていく面は争われないわけでありませぬ。われわれの生活はどんどん便利になっていくし、ものも豊かになっていく。そういう意味では、歴史は進歩の過程であることにまちがいはないわけです。しかし、どんどん豊かになり、生活が便利になると、それでわれわれが幸福になって人生の問題が解決するかどうかと、そうでないということですよ。これも今の世の中では認識されてきておりますね。いろいろな意味で一時は支配的であったかのように見えた進歩史観・発展史観というものは、歴史のある一面は確かに突いておりますが、すべてではない。最近、人はそういうことをだいたいぶ気がついてきた

し、他の面を見ることが必要であることが認識されてきたように思います。

そうしますと、先ほど進歩・発展史観の根源がキリスト教にあることをいいました。しかしこれはキリスト教そのものではなく、神を取り去ったキリスト教ですね。さらに翻って歴史を見ますと、キリスト教を産んだのはアジアですが、発展して文明の基礎になったのは西洋、ヨーロッパですね。今日の世界的な見地から申しますと、ヨーロッパの産んだキリスト教というのは非常に立派なものであるし、その思想は深いものがありますが、ヨーロッパだけが世界ではないのであつて、あるいはまたキリストが生まれてからあとだけが世界なのではない。世界史というのはもつと大きなものである。

そう考えますと、西洋でいえば、キリスト教が支配的になる前にギリシャ文明というものがあることは、皆さんご承知おきのとおりであります。ギリシャは非常に優れた歴史家を生んでおりまして、皆さんも名前は知っておられると思います。ヘロドトスとトゥキデデスという歴史家がなかなかおもしろい歴史の本を書いております。ギリシャの歴

史観を見ますと、キリスト教のような最高の神があり、それがわれわれの生活を律しておつて、神の計画の実現として歴史が動いていくという考え方はない。ヘロドトスもトゥキデデスも、ギリシャ戦争とかペロポネソス戦争とかを書いていっているのですが、そういうのを見てみますと、近代の歴史観とは別の、近代的な意味の言葉を使えば、歴史を超越した永遠の人間性に基いて歴史を書いている。ギリシャの歴史をいちいち読むのは大変ですが、もちろん日本語の訳があります。わたくしが尊敬しているのは田中美知太郎(1902-1983)です。田中先生という方は、京都大学の西洋古典の先生で、数年前定年で辞められました。今

(講演当時)は文筆のほうで活動しております。この田中先生という方は、ギリシャについていろいろものを書かれていますね。ギリシャ哲学によって鍛練された精神でもつて、現代のことを批判して方々にものを書いておられます。田中先生が書きました『ツキユデデスの場合』(一九七〇年、筑摩書房)という本がありまして、かなり大きな本です。これを読むのはちよつと骨が折れます。ペロポネソス戦争の歴史のことをトゥ

キデイデスがどう言っているか、どうい
うような思想が出ているかということ
です。これを見ますと、近代の歴史観と
はちがった、ギリシヤ人の歴史観がわか
ります。つまり、人間というものは歴史
の変化・発展にすっかり縛られておっ
て、それによって性質がどんどん変わ
っていくという考え方は別に、そういうも
のを超越して変わらない人間の共通の
性質というものがあるということです。

今度は東洋のほうを見てみますと、ま
た近代の進歩史観とはちがって、やはり
永遠の人間の性質に即して歴史を眺め
る見方が、歴史の中にずっと流れてい
ると思います。案外、近代の人間が歴史意
識とか歴史観とか言っておったのは、世
界全体の上からみれば部分的です。西洋
のキリスト教以後の歴史観であって、し
かもキリスト教本来の根本的なところ
は抜かして、ただキリスト教が一方で教
えた変化の相だけをとらえた歴史観で
あります。これは、近代人を少し強く支
配しすぎていたのではないかと思いま
す。レーヴィットも同じようなことをい
っています。題を忘れてしまいましたが、
これによると、現代人は近代の歴史に少
し毒されすぎているのであって、もっと

ギリシヤ人の歴史観を省みなければい
けないといっております。さらにレーヴ
ィットは、日本に長くいたものですから、
日本のことをよく知っております。日
本の戦国武将が激しい戦いをしながら、
同時に仏教の無常感をいつも心にもつ
ておっ、権力闘争に明け暮れるかたわ
らで仏門に帰依する。そういう中に、近
代の西洋人の歴史観からは得られない
優れた歴史観があると書いております。

そういうように、近代の西洋は、一方
においては物的生活の進歩の成果は偉
大なものであつたし、またそうであつた
からこそ西洋文明がそれ以外の地域を
征服しました。近代思想がほとんど西洋
思想のようになったことは、決して理由
のないことではありません。しかし、現
代ではそういうことの行きづまりが感
じられている。西洋人自身によって感じ
られている。人間は時代に縛られておっ
て、それによって人間はどんどん変わっ
ていくという考え方は、歴史の一面をと
らえていたにすぎない。もちろん、変化
する面を見逃すことはできませんし、民
主主義の時代に封建時代の道徳を振り
まわしたつて通用しない。人間関係や価
値観も時代とともに変わっていく。しか

し、かたちは変わっても、たとえば人間
の社会には道徳というものがあるとい
うような、基本的な人間生活のあり方は
変わりません。道徳のカタチが時に変わ
ることがあつても、道徳がなくなること
はないわけです。道徳や倫理というもの
は、人間の社会をつくっていくためには
絶対に必要なものでありまして、ある時
代のある観念が通用しなくなつたから
といつて、道徳なんて要らないとはいえ
ない。あるいはデモクラシーの社会です
から、個人の権利を大いに主張するよう
になつてきて、主張するのは当然のこと
ですが、権利ばかり主張して義務と責任
がなくなるかといつと、そういうことは
ない。権利を主張すると、同時に今度は
それにともなう義務、責任が必要だとい
うことは、依然として変わらないわけ
であります。人間生活のなかで、人間が自
分を律していくために守らなければな
らないルールのようなものがある、それ
が道徳である。われわれがそういうもの
に従わなければならないことは、どんな
に時代が変わろうと変わることはない、
不変の真理であります。

それから、人間と人間の情愛というよ
うなものもあります。誤つた近代的歴史

観では、たとえば封建時代は侍が iba べて平民は虐げられておったというふう
に考える。過去の日本の歴史なんか、非
常に暗い、悪い歴史であったといいたが
る人が往々にしてあります。たしかに封
建時代の社会の仕組は今とはちがいま
すから、今日に通用しないことはたくさ
んあります。しかし、ごく少数の人間が
いばって悪いことばかりして、民衆はた
だ虐げられてばかりいる善人だったの
かという、そんなことはないものであり
ます。当時の世の中がそういう状態であ
ったのは、ひと口でいうと今のようにな
だ産業などが発展していませんから、そ
ういうところから身分制度というもの
があつて、それで社会の秩序が保たれて
きたというのが実情であります。産業が
発展してくれば、人間の知識も向上する
下の身分だったのが、だんだんと個人の
権利やデモクラシーが発達してきたわ
けです。中世の封建時代のこと今日の
基準に合わないからといって、昔の人間
はバカだったとか、少数の人間が勝手な
ことをして多数の人間は虐げられてば
かりいたとか考えがちですが、そうでは
ないのであります。昔の武士は下の者に
対していばっておつたし、今日からみれ

ばずいぶん勝手なことをしておつた面
があります。同時に彼らは厳しい規律
のなかに生活しておりまして、同時に支
配階級であるために非常な危険を身に
引き受けて生活しておつた。これが昔の
武士でありまして、何も自分以外のもの
を虫けらのように思つておつたわけは
ないのであります。やはり世の中に対
する責任や義務を負つておるし、下の者
に対してはただ悪いことをしていたわ
けではなく、下の者のために尽くした面
もあります。変わらない人間関係、同時
にそこから生ずるところの人情とか情
感とかいうものは、時代がちがつてもず
っと存在しておるのであります。
ずいぶん長くしゃべりましたが、わた
くしの言いたいのはこのことであ
ります。われわれは、歴史というものは
どんどん変わっていくという一面を決
して忘れてはいけません。時代の進歩・進
展、新しく出てくる文明の利器といった
ようなものを充分認識し、正しく駆使し
ていくためには、そういう変化の相を知
ることが非常に必要なことであります。
そういう点では改めるべき点は改めな
ければならないし、ただ頑迷に古いこと
を守ろうとしても世の中そうはいきま

せん。しかし、人間社会というものがど
んどん変わっていくにもかかわらず、人
間性というものは古代から現代まで変
わらないものが流れている。この面を見
落としてはいけないということであり
ます。
現在の世の中でいろいろな問題が起
こつております。いわゆる人間性の喪失
であるとか、人間の自己疎外とか、いろ
いろなことがいわれております。今日、
文明が発達して繁栄した世の中で、生き
がいの問題など、いろいろなことがいわ
れるようになりました。解決といつても、
そんなに解決されることはありません
が、そういう問題に対してわれわれが立
ち向かつていくためには、結局、過去の
優れた、精神的、文化的遺産に学ぶこと
だと思ひます。いかに時代や社会がちが
つても、昔からの古い哲学あるいは優れ
た文学作品のような、真剣な人間性探求
の跡の積み重ねが古典というかたちで
今日に残されている。昔のものだから考
え方がちがうとか、価値基準がちがうと
思うのはまちがつておりまして、結局、
われわれにとつていちばん大事なことは、
たえず古典というものに親しんでそ
こから直接学ぶということでありませ

個々の断片的な事実はどんなかたちでも学ぶことができませんが、優れた人間が優れた探求をしてその跡を残したものは、何千年前のものであれ何百年前のものであれ、直接われわれに働きかける強い力をもっております。

わたくしは、皆さんがたは大いに現代的な生活をする必要があると思います。時代遅れのことなんかにしがみついている必要はないのであって、どんどん新しい生活するのがよいと思います。しかし、どんなに新しい生活にしても、人間性というものは昔から今まで変わらないものがあり、古典を通じて伝わっている先人の精神というものは、これにたえず立ち返ることによってしか、現代の文明社会におけるいわゆる人間疎外や生きがいのなさということに対処する道はない。これが歴史における変化と不変ということでありまして、わたくしが今日お話ししたいと思ったことであります。

それでは、これで。(拍手)